

「日本人の英語力」
ブルース・L・バートン
2000.6.9 放送

今回は、日本人の英語力について考えてみたいと思います。私はこのテーマについていろいろな日本人と話したことがあります。相手は必ずと言っていいほど、次のような意見を言います。「日本人は中学校や高等学校で6年間にわたって英語を勉強するのに、簡単な英会話もできない人が多い。その理由は教育の仕方が悪いからだ」、と。言い換えれば、中学校や高校でより適切な英語教育さえ行えば、生徒が皆英語の達人になるはずだということになると思います。

これは一見ごもっともな意見に聞こえますが、私はこの場であえて異論を唱えたいと思います。日本人は一般的に言われるほど英語が下手だとは思いませんし、多少問題があるとしても教育制度だけのせいにするのはおかしいと思います。

まず日本人の英語力についてですが、ここでいつも持ち出されるのは TOEFL という英語能力試験の国別結果です。ご周知のとおり、この試験における日本人受験者の平均成績は、アジア諸国の中でもっとも低い部類に入るもので、毎年試験結果が発表されると、マスコミが日本人の英語力の低さについて騒ぎだします。

ところが、このような結果が表しているのは、日本人の英語力そのものというよりは、日本における受験者の数ではないかという見方もできます。つまり、ほかの国では英語に自信のあるごく一部の人しか TOEFL を受けないのに、日本ではできる、できないを問わず、大勢の人が毎年受けるので、平均スコアがどうしてもほかの国より低くなる、ということです。

私個人の意見として、日本人の英語力は一般的に言われるほど低くないと思います。勤務先の大学で日本人の同僚や学生とよく英語で話したり、Eメールを交わしたりしていますが、多くの人はある程度英語ができますし、なかにはネイティブとあまり変わらないくらい上手な人もいます。大学だから特殊な環境だと言われるかも知れませんが、大学を離れても英語が上手な人は以外と多いのです。たとえば、日本語が分からない外国人が日本に来て、街角で英語で道案内を尋ねても、数分のうちに適切な英語で対応できる日本人は必ず見つかりますが、これはかなり素晴らしいことではないでしょうか。

それでも学校でたくさん勉強しているから日本人はもっと英語ができるはずだという意見もあるかも知れませんが、一言で言うところの考え方は甘いと思います。その理由を理解していただくために、言語習得のプロセスについて少し説明しましょう。

まず母語の習得から始めたいのですが、人間は皆幼児の間、どんな言葉でも簡単に覚える力を持っています。周りの人が普段使っている言葉が自然に耳に入り、母語となるわけですが、それ以外の言葉でも、日常的に聞く機会さえあれば、だれでも若いうちは難なく習得することができます。思春期が過ぎると新しい言葉をマスターすることは一般論とし

て難しくなりますが、やはり住む環境によって覚え方がかなり異なってきます。外国に住んだ経験のある人は誰でもこのことが分かります。

しかしこの点は日本人の英語を考えた場合、かなり重要な意味をもつのではないのでしょうか。つまり日本に生まれ育った人は、周りの人が日本語ばかりを使うから自然に英語を覚えることができませんし、中学校から習い始めても、ある意味では遅すぎます。もちろん高校生あるいは大学生の時に海外留学に行くチャンスがあれば話は別ですが、日本国内にいながらにして英語を覚えるということはかなり大変だと思います。それでも特別な語学才能を持った人や、特別な環境にいる人はかなり上手になりますが、大多数の日本人はどんな教育を受けても、どんな努力を払っても、英語をネイティブのように話せるようになるということは難しいです。日本は英語が日常的に使われる社会ではないからこれは当然のことで悔やんでもしたかがありません。

誤解のないように断っておきますが、私はどうせ若い人たちが英語の達人にならないから英語教育のあり方を考える必用もない、と言っているわけではありません。ご周知のとおり、日本の英語教育に実際さまざまな問題がありますし、一つ一つ解決していけば、それなりの効果があるはずで。

たとえば、先ほど触れたように、若い人に英語をもっと覚えて欲しいければ、中学校ではなく小学校から始めるべきでしょうし、教育内容も、文法や語彙の暗記ではなく、会話の練習など実際に役に立つ英語を中心としてやらなければなりません。さらに言えば、今の画一的な教育に代わって個々の生徒の語学能力や個別ニーズに応えるべく、レベル別のクラス分けも望ましいと思いますし、何よりもクラスあたりの平均人数を大幅に減らさなければなりません。これらの点さえ改善すれば、若い人たちの英語力はさらに向上するに違いありません。

しかし同時に、こうした工夫の効果に限度があるということも忘れてはならないでしょう。なぜなら、今まで説明してきたように、外国語を習得するに当たって一番重要なのは、学習者が生まれ育つ環境がであって、受ける教育ではないからです。日本社会自体が大幅に変わらない限り、日本人の平均英語力に飛躍的な向上を望むことは無理でしょう。

ここであえて「日本社会が大幅に変わらない限り」と申し上げたのは、ご存知のように、英語を日本の第二の公用語にすべきだという議論が最近浮上しているからです。この案がもし実施されれば、日本人が英語を日常的に使われざるを得ない環境が人工的に作られることになり、語学習得の面だけを考えると大きな効果が得られる可能性があると思われま

す。

しかし果たしてそこまでやる必要はあるのでしょうか。私はないと思います。繰り返して説明するように、日本人の英語力は、一般的に言われるよりは高いし、生活を送る上で十分だと思われるからです。平均以上の英語力を望む人は、現在でも英会話スクールに通ったり留学したりすることによって習得することができます。全国民にこれ以上英語を強制する必用がどこにあるのか、私には分かりません。

さらに言えば、英語はもちろん大事でしょうけれども、ほかの外国語も同じように大事ではないでしょうか。日本人の英語力について議論するのは結構なことです、それだけではなくたとえば中国語やロシア語、スペイン語なども視野に入れて議論を進めるべきだと私は思います。将来はともかくとして現在では世界が英語だけで回っているわけではありませんし、日本人のニーズや関心は政府が考えているよりはずっと多様なものであるはずです。教育内容にしても、公用語の問題にしても、上から画一的な考え方や制度を国民に押し付ける時代はとっくに終わっているのではないのでしょうか。

それでは。